

自 己 評 価 報 告 書

令和4年2月17日
九度山町立九度山中学校
校長 前田 南海男

	項 目	内 容
1	教育目標、教育課程について	<p>教育目標</p> <p style="padding-left: 2em;">夢や希望に向かって、自ら考え行動し、地域とともに歩む生徒の育成めざす生徒像</p> <p style="padding-left: 2em;">(1) 自ら学び・考え・努力する生徒</p> <p style="padding-left: 2em;">(2) 心豊かで、自分も他者も大切にす生徒</p> <p style="padding-left: 2em;">(3) 強い身体とたくましい心をもつ生徒</p> <p style="padding-left: 2em;">(4) 地域や学校に誇りをもつ生徒</p> <p>これらを学校教育目標と定め、各教科、特別の教科である道徳、特別活動及び総合的な学習の時間の指導、学校行事や部活動等学校教育全般で目標達成に向けて取り組んだ。教育課程については、昨年度のようにコロナ禍による長期の休校もなく、授業時間確保のための長期休暇の変更等の必要がなくほぼ計画通り実施することができた。また、コロナ禍での活動制限があったが、それぞれの学年で、介護体験・職場体験・地域学習・保育実習等を実施できた。さらに、学校全体では平和学習・人権学習・ボランティア活動等の体験的な学習を通し、地域や地域に生きる人々の誇り、時と場合に応じた礼儀や言動、高齢者に対する敬愛の念、障がい者への理解、平和の大切さ等を学ばせ、豊かな心を持ち、礼儀や正義を重んじる生徒の育成に努めた。生徒評価アンケートでも、ほとんどの生徒が「思いやりや優しさの気持ちを持って生活できた」、「学校で命の大切さや、社会のルールについて学んだ」と回答している。</p> <p>学校教育目標・経営方針はコロナ禍により直接保護者に説明する機会がほとんどなく、学校だよりや学校HPを通して周知に努めた。学校評価アンケートでは「学校は教育目標・経営方針を保護者・地域の方にわかりやすく伝えている」・「学校は魅力ある学校づくりに努めている」・「学校は開かれた学校である」と肯定的に捉えてくれている保護者が多いが、「わからない」と回答した保護者が年々増加している。また、年度途中での点検のため、令和元年度から学校評価アンケートを前期(6月)にも実施し、質問や意見をいただくようにしているが、教育目標等に関するものはほとんどない。保護者へももっと分かってもらえるようにするため、めざす生徒を育成するために、どのような教育活動を計画し行っているのかを具体的に分かりやすく説明する必要があると思われる。</p>

2	教科指導について	<p>昨年度に引き続き、研究主題を『主体的に学び高め合う生徒の育成』と設定し、全教科・領域において、生徒がアウトプットする授業を目指した。そのため、学習課題に対して主体的に取り組み、さらに深く探究していこうという意欲を向上させるための指導方法の工夫改善を図った。授業を改善することにより学びの質を高め、自分の考えを表現し、他者との対話、自己との対話を通して課題を解決し、自ら課題に向き合おうとする生徒の育成を目指した。</p> <p>昨年度は生徒アンケートでも「自分の考えをもち、それを表現している」と回答している生徒が増加しているため、本年度は授業改善のポイント②を少し発展させ、「①授業の課題について、主体的に学びたくなる（「やってみたくなる」）課題を提示しているか。自分のこととしてとらえられる課題を設定しているか。②課題解決のため、対話的な学習場面を設定し、課題解決のため、効果的な活動につなげているか。③まとめでは、わかったことを自分の言葉でまとめ、活用しようとしているか。」と設定した。</p> <p>本年度も校内研究授業を全教員が2回実践し、前期に行った研究授業で参観者から出た意見等をもとに、後期ではさらに改善した研究授業を行い、研究協議を行った。特に、研究協議においては「授業改善のポイント」に焦点化した論議にすること、KJ法等を活用し活発な意見交換をすることにより教職員の授業力向上に努めた。協議の内容や日々の授業参観からは『研究主題』の捉え方について教員間でベクトルが符合しつつあり、改善が進んでいることを実感している。来年度もさらに推し進めたいと考える。</p> <p>生徒アンケートの特徴から、①自分の意見を積極的に言える生徒が増えている反面、自分の意見を発表する機会が減ったり、躊躇したりする生徒が増えているのではないかと。②先生への質問の機会が減る傾向にあり、これは、協同的な学習が進んでいることにより、疑問点は教師に質問するのではなく、自分たちで解決できているのではないかと。③先生が分かりやすい丁寧な授業をしていると回答している生徒の割合が減少していることから、先生がひたすら『絶対解』を話し、生徒を分かった気持ちにさせている授業から、生徒が自ら答えを見いださそうというスタイルへの変換がはかられているのではないかと。という仮説を立てた。来年度はこのことを検証したいと思う。</p> <p>教職員の自己評価アンケートでは、昨年度は「指導計画・評価計画に基づいた指導・評価」は完全ではないという評価ではあったが、コロナ禍による長期休校もなく、計画通り授業等が実施することができたため改善されている。</p> <p>家庭学習の習慣化を図るために、「家庭学習の手引き」を作成し、家庭学習の仕方や「家庭学習ノート」の指導を行うとともに、6限の後に「九中タイム」を15分間設け、生徒個々がその日の授業を振り返り、家庭学習の計画を立てる時間とした。どの学年でもこの「九中タイム」を有効に活用し、前向きに取り組むことができた。全国学力・学習状況調査では、「1日2時間以上家庭学習する生徒」の割合は全国平均を25ポイント程度上回っている。</p>
---	----------	--

		<p>なお、3年生が4月に実施した全国学力・学習状況調査では、国語が全国平均をやや上回り、数学は4ポイント程度（県平均よりはそれぞれ5ポイント・6ポイント）上回った。また、10月に実施した「和歌山県学習到達度調査」では、県平均と比較すると、1年生では国語、数学ともにほぼ同じ。2年生では、国語はほぼ平均、数学と理科は2～3ポイント程度上回った。</p> <p>今後も教科の学習指導については、それぞれの生徒にある課題を把握したうえで、個に応じた指導を継続していきたいと考える。</p>
3	<p>道徳教育、特別活動、人権教育について</p>	<p>「特別の教科道徳」については、道徳の授業や職場体験学習・ボランティア活動等の体験的な学習を通して、①道徳的諸価値について理解させること。②自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に捉え、人間としての生き方についての考えを深めさせることで、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てることを目指して教育を行った。道徳の授業時間数を確保し、担任だけが授業を受け持つのではなく、副担任も授業を担当することにより、学校・学年全体で指導計画に基づいた授業を実施することができた。道徳の授業では学習内容を深めるため、対話的な学習形態にすることが多く、本校の研究主題との関連から道徳の研究授業の回数が増え、より改善された授業を参観することができた。生徒アンケートでは、「生命の尊さ」について、ほとんどの生徒が「学校で命の大切さ」について学んだと回答している。</p> <p>人権教育については、NHKスペシャル『あの日、僕らは戦場で～少年兵の告白～』を教材にして、国内最大規模の地上戦が展開された沖縄戦について学習した。沖縄戦では多くの一般住民が犠牲になったことや、少年や高齢者までが戦闘員として巻き込まれたことを知り、戦争は当時の少年たちにどのような影響を与えていったのかを考え、人権と平和、戦争について、より主体的に学習する機会になった。また、介護体験学習では、「障がいのある状態」を疑似体験することで、高齢者や障がいのある方の身体状況や気持ちの一端を理解することができた。しかし、今年もコロナ禍により講演会は実施できなかった。</p> <p>特別活動の主たる目的を自主・自立の精神の育成におき、生徒主体の行事作りを目指した。しかし、コロナ禍での行動の制限等により、運動会は実施することができたが、生徒会執行部の発案で平成27年度より始まった校内音楽祭は今年も実行することができなかった。このような状況の中でも、生徒会では、「あいさつ運動」や「朝の清掃活動」等を実施した。また、縦割り班でのスポーツ大会を企画し、主体性を発揮した。</p> <p>部活動については、コロナ禍により活動が制限されたが、昨年よりは多くの大会が実施され、自己鍛錬やチームワークや友情を育む場として熱心に活動した。卓球部は県大会、ソフトテニス部は県大会や近畿大会に出場するなど優秀な成績を収めている。</p>

		<p>今後の課題として、生徒数の減少に伴い部活動のチーム数が少なくなったこともあり、積極的に参加しない（できない）生徒もやや増加している。適切なチーム数や指導のあり方についても検討が必要になると思われる。また、部活動に対しての保護者の考え方も様々であり、保護者へも十分な説明を行い、運営方針の理解と協力が欠かせないものと思われる。</p>
4	生徒指導、進路指導について	<p>生徒との信頼関係を大切にしながら、問題行動の早期発見と即時対応に心がけるとともに、全教職員が共通理解し、担任や生徒指導部まかせにならないよう留意するとともに、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー、九度山町教育委員会や福祉課との連携を心がけた。特に、生徒自らが善悪の判断を正しくできるよう学級活動や全校集会等で指導したことにより、生徒は学習や部活動に熱心に取り組み、真面目に学校生活を送ることができた。これからも、生徒の自立の精神と正しく判断できる力を育む指導を大切にしなければならぬと考える。また、年3回の「いじめアンケート」等によりいじめの実態把握に努めた。</p> <p>生徒アンケートでは、「先生は、いじめやけんかななどで、私が悩んだり困ったりしているときは相談しやすい」と、9割近くの生徒が感じている。これからも、普段から生徒との信頼関係の構築を基本とし、教職員相互の情報共有を図り、学校全体として組織的に指導を行っていきたい。</p> <p>大きな課題として、学年の途中から不登校や別室登校になってしまう生徒がいることである。機会あるごとに各担任と養護教諭やスクールソーシャルワーカー（さらに町支援員や町家庭教育支援サポートチーム「きらら」支援員の場合もある）による家庭訪問や、本人・保護者とスクールカウンセラーとの教育相談を機会あるごとに実施した。また、管理職と関係教員等によるケース会議を定期的にも実施した。さらに、職員会議（月1回）でも、情報の共有と取り組みの意思統一を密に行った。しかし、生徒の言う「学校に行けない理由」を解決しても登校できることはなく、「行けない理由」探しだけでは根本的な解決にはならないケースが多い。本人の意志で行かないケースもあり、学校だけでは解決できないことも多く、関係機関との連携が不可欠である。ただし、本年度については、教員アンケートでこの「連携」についての評価が低くなっており、それぞれのケースでの連携について来年度の課題となっている。</p> <p>進路指導については、キャリア教育指導計画を作成し、1年生では将来の夢や進路や職業について、2年生では上級学校や職場体験学習、3年生では具体的な進路選択について学習している。入学時より自分の将来を見通して、自分の生き方や進路に関心をもたせること、また、目標実現のため生徒一人一人の個性や特性を考え、自らが進路を選択できるようになることに重点をおき学級活動や個人懇談で指導した。また、キャリアパスポートを有効に活用したいと</p>

		<p>考える。</p> <p>しかし、10年後にはAIにより現在の職業の半数がなくなるとも言われている現状を踏まえた指導の必要性を感じている。</p>
5	安全管理、保健管理について	<p>保健体育の授業や保健だより等を通し、健康増進と健康管理、体力向上のための指導を行った。</p> <p>特に新型コロナウイルス感染予防のため、石けんや消毒液等を適切に配置する、毎日複数人が触れるところを消毒する、用具や器具などを使用するごとに消毒する、常に換気を怠らない、給食時の会話制限、密集させない等たくさんの対策を行ってきた。また、インフルエンザや食中毒等については、保健だより・学年だよりを通して予防の方法等について周知し、学級等でも指導の徹底を図った。</p> <p>交通安全については、特に自転車運転時の交通安全について、橋本警察署の協力のもと「安全教室」を実施した。また、PTA役員の協力も得ながら毎月1日と15日の登校指導を行った。本年度も下校時の交通安全等について地域の方や保護者の方から注意やアドバイスをいただくこともあり、その都度、機を逃さず指導した。</p> <p>防災については、非常事態でも自ら判断し行動できる生徒を育てるために、火災発生・地震発生を想定した避難訓練を行った。また、町役場の担当者等に来校いただき、「防災教室」を実施することができた。生徒アンケートでは「災害時に自分がすべき行動」について、ほとんどの生徒が理解していると回答している。今後も安全管理について教員が十分把握し、訓練や生徒への学習を実施していきたいと考える。</p>
6	特別支援教育、教職員組織運営、研修について	<p>本年度本校には特別支援学級の知的学級に2名の生徒が在籍している。生徒の個性を理解し、授業カリキュラムも個人別に作成するなど落ち着いて学習できる環境づくりに心がけた。今後も全教職員の共通理解のもと、引き続き特別支援教育についての研修を具体的な事例を交えながら行い、生徒個々の教育的ニーズに応えられる支援体制を図っていきたい。</p> <p>また、月例の職員会議を中心に、教職員の意思疎通を図り、教職員一人一人の能力が有機的につながり十分発揮できる学校組織となるよう運営し、教員それぞれが自己の責務を把握し、適切に遂行することができた。</p> <p>校内研修では、研究主題に基づく授業づくりを定期的に行った。また、生徒が抱える様々な課題に対する理解や対応について全教員による協議や研修会、個人別・課題別のケース会議を重ねてきた。しかし、不登校生徒への対応等については研修の成果がすぐに出てくることは稀であり、体験や経験を重ねながら研修や実践を続けていくことの必要性を感じている。</p>

		<p>教職員個人の研修についても、年度初めに自己目標を設定し、機会をとらえて研修を積むことができた。</p>
7	<p>保護者・地域との連携、学校行事等について</p>	<p>保護者や地域の方と連携するためには、お互いのことを分かり合うことが重要だと考える。特にコロナ禍においては、人が集まることに制限があり、直接ふれあう機会が少なくなっているため、学校の様子等を伝えるための方法として、学校ホームページでは行事予定・授業や学校行事の様子を伝えたり、学校だよりや学年だより等の配付物のデータを積極的にアップしたりするようにした。また、「学校だより」で校長の思いや生徒の活動の様子等を知らせるために、保護者だけでなく九度山中学校区の各地区に回覧物として発信した。保護者の考えを知るため、学校評価アンケートを年間2回実施し、いただいた質問や意見を真摯に受け止め、改善等の必要があるものについては速やかに実施したり、疑問に対して回答したりした。</p> <p>本年度保護者アンケートの特徴として、設問全体の平均では肯定的な回答（「とてもそう思う」＋「まあそう思う」）が4ポイント減少し、否定的な回答（「あまりそう思わない」＋「全くそう思わない」）が1ポイント減少している（その結果、「わからない」と回答した割合が5ポイント増加している）。昨年度も「わからない」と回答した保護者が増えており、コロナ禍における学校行事等での保護者の関わり方や回数の変化がその一因であるとも思われるが、学校の教育活動について丁寧に説明し、理解していただいたうえで学校や教員が信頼されることが大切であると思う。ただし、いただいた保護者の考えは多様であり、中には相反するものもあるので、全ての方が納得していただけるとは思っていない。基本的には、子どもの将来のことを中心に考えた教育活動を実践していきたい。</p> <p>1年生で実施した「地域を知る学習」では、「危険道路」・「防災」・「街灯」・「ゴミ問題」・「お店の現状」・「イベント」がテーマとなり、テーマごとにグループに分かれ、実際に現場で調べたり、町役場の担当者等に聞いたりして調べた。学習した成果は「地域学習発表会」で、2年生や教師の前で発表することができた。生徒にとってふるさとを深く知るといへん意義深い機会となった。</p> <p>地域の中の学校として、まごころ弁当の表紙作りに全校生徒で取り組んだ。この取り組みは、高齢者との心の結びつきを強めるとともに尊敬する態度を培うこととなった。また、例年行っている「お弁当作り体験」はコロナ禍の影響で中止となった。地域の方々とのふれあいの場としてすばらしい取り組みであることから、来年度は実施したいと考える。</p> <p>来年度もよりいっそう「学校の思い」や「学校の様子」・「学校の魅力」を積極的に伝えるため、校長だけでなく他の教師やできれば生徒からも発信することを考えていきたい。ついでに、即時性や承認過程の煩雑さに課題があるホームページシステムのさらなる改善を町へ要望したいと考える。</p>

	<p>コロナ禍のなか、本年度も学校行事は中止されたり、形を変えて実施されたりしたが、生徒は、学校行事に熱心に取り組んだ（学校評価アンケート）。コロナ後の新しい学校像を考えると、学校をリデザインするきっかけにしたいと考える。これまでのどの行事も生徒にとっては有益なものではあるが、授業時間や労力のコストと効果の関係や、教職員の働き方改革という観点からもさらに見直していきたいと考える。</p>
--	---